

学はあってもバカはバカ

東京の「雙葉学園」は、東京の女子高御三家のひとつで、成績優秀な生徒が進学するところである。(註;大阪では、まったく知られていない。また興味もない。)カトリック系の学校だが、並のお嬢様学校だと思ったら、間違いである。

雙葉のトイレに入って、清潔さに驚かない人はいない。床や壁のタイルは、手術室のようにきれいである。

トイレの掃除は、生徒たちの仕事になっていて、生徒の話を知ると、掃除と言うより磨き上げると言う方が当たっている。体操着になり、雑巾を何度も何度も絞って、拭いて拭いて拭きまくるのだそうである。

ある日、高校生の教室に来た老シスターが、「皆さんは、なぜ雙葉にきているのか、知っていますか？」

生徒が一斉に「いい大学にはいるためです。」と答えると、老シスターは言った。「それは違います。みなさんは、良きレディーになるために雙葉に来たのです。」よきレディーとは、どういう女性か？

自分が使うトイレは、いつも自分できれいにしておく。これがよきレディーへの第一歩です、というのが雙葉の伝統なのである。

週刊朝日の編集長から朝日新聞の編集委員になった川村二郎氏が、あるシスター(つまり女性教師)に教育について話を聞いたことがあった。

その女性教師はこんな話をした。

日本では偏差値の高い大学をでていると、それだけで「頭がいい」とか、「エリート」と言われる。雙葉は、名門といわれるだけあって、いわゆるエリート家庭の子供が多い。先生は、そういう家庭のご主人が何かにつけて学をひけらかし、へ理屈の多い口説の徒か、実例を挙げて語った。そういうバカの相手をするのうんざりしているようで、

「学はあってもバカはバカ」です、と切り捨てたのである。

ベストセラー「バカの壁」がでる10年も前のことである。

お嬢様学校の女性教師の口から、「バカ」が何回もでてきたことにびっくりした。

それにしても「学はあってもバカはバカ」とは考えつかなかった言葉である。シェークスピアでもこんな気の利いたことは言えまい。ちぢめて「学のあるバカ」あるいは「学バカ」と呼ぶ……思わずうなった。

この川村二郎氏の本が出版されたのは2004年、雑誌Willに掲載されたのが、2017年11月号である。

最近のテレビを見ていると、「学のあるバカ」があちこちで増殖しているような気がしてならない。

タイミングとしては、総選挙直前に書いたものらしいが、不倫で民進党を去った女性議員や、最近書いた夕陽の鬼瓦など、東大・ハーバード大卒だという。そんなのが、違うだろ！ハゲー！と罵るのである。しかも月刊誌で言い訳したというから鉄面皮でもあるようだ。ただし、秘書もテレビに出演していたというから、こいつも羞恥心のない男で、よくまあ、それだけミスをするものだ、とボクなど呆れていたのだが、あまりのひどさにまともな秘書がいなくなって、この程度の男しか残らなかったのやろね。

川村氏は、この話を聞いた瞬間、宮沢喜一元首相を思い出したという。以下、宮沢氏の悪口のオンパレードである。少し長くなるが、それを書かないと前後の関係がわからなくなるから、引用する。

宮沢喜一氏はが英語に堪能で、経済理論に通じた有能な政治家であることは、政治部や経済部記者や政治家から、しょっちゅう聞いていた。

その学識は司馬遼太郎さんからもしばしばお聞きしていた。

司馬さんはある時期、宮沢喜一氏と京都の寺で定期的に開かれる会合で一緒になることがあったようで、「宮沢さんはお寺の額のような難しい書でも、スラスラお読みになる。あの真似はようできん。すごい人や」と話しておられた。

1991年11月、宮沢喜一氏が総理大臣になったときは、いい時期にいい人が首相になってくれたと思った。司馬さんも「僕らと酒を呑む」、同じようなことをおっしゃっていた。

ところが首相になって3,4か月すると、ボクのような政治や経済の素人にも「ちょっと待てよ。この人の学に惑わされて、期待をしすぎたのではないか」と思わせる場面が目につくようになってきた。

新聞やテレビの報道を見ていると、この人は、日本のために政治は今なにをしなければならぬか、よくわかっている。

どうすればできるか。その方法も承知している。(What to do) も(How to do) もわかっている。

あとは実行に移せばよい。

彼は総理大臣である。実行できる地位にある。(つまり権力があるということである。)

ところが、じっとして動かない。相変わらず、評論家然としている。見ていて歯がゆくてならなかった。

日本は90年代を迎え、のちに「空白の十年」といわれる時期に入っていた。

バブルがはじけ、不良債権の処理を迫られていることは、識者の間でいわれていた。処理するためには、税金を投入する以外になさそうなことも、ささやかれ

ていた。マスコミは猛反対していたけれど。

司馬さんも、

「ここまできたら、税金を使わなあかんやろ。宮沢さんは、その話を国民がわかるようにきちんとできる人やと思うたけど、あの人はようせんなあ。」

と言われることが、何度かあった。

そのうち、この人について話すことがなくなった。司馬さんも僕らと同じように、期待が大きかった分、失望も大きかったのかも知れない。

そのころ、白洲正子さんのお宅にちょくちょく遊びにいらっていたが、いくと、決まって宮沢氏の話がでた。

宮沢氏は、池田勇人蔵相の秘書官だったころ、吉田首相の片腕といわれた白洲次郎さんに教えを仰ぐようなことがあったようだ。

白洲正さんは、

「うちの次郎さんは、宮沢さんのことを『あいつはすごい』といらっていたの。でも、私は『この人は頭だけの人じゃないか』といら思った。だって『僕は心眼なんて信じません』なんていうんだもの。でもみてごらんないさい。次郎さんより、私の目の方が正しかったでしょ」

と、僕の顔を見ればいら言っていた。この考えは、亡くなるまで変わらなかつた。

どうやら白洲さんは、宮沢喜一氏と全国紙、中で朝日新聞の記者に、似たものを感じていららしく、

「お勉強のできた人っていらいうのは、自分の身を安全地帯に置いていらおいて、それであれこれ言うでしょ。私は卑怯だと思いうのよ。だから私は朝日が好きになれないの。(以下略)」

ちなみに、白洲さんは、朝日新聞ではなく、「東京新聞」を購読していらた。

しかし、親しくいらされていらた秩父宮妃勢津子様が亡くなられたとき、追悼文を寄せたのは朝日新聞だつた。心の底では、朝日が好きで、それだけに朝日に期待するところがおおきかつたのだ、と僕は思っている。……註：まったくの勘違いです。東京新聞といえは、朝日と並ぶ、ときに朝日を凌ぐ左巻き新聞である。新聞に期待するところなど何もなかつたと思いうたい。だからどの新聞でもよかつたのだ。朝日に書いたのは、単に、東京新聞よりも部数が大きかつただけのことではないか。

「学のあるバカ」の特徴のひとつに、したり顔をして、わけのわからないことを得々と語る。……一緒に酒を呑んだり、仕事をしたくない人である。

たとえをひとつ。NHKのアナウンサーが、横綱昇進を決めた大関に向かつて「大関にとって、横綱とは何ですか？」ハアハアゼエゼエいらてる人に、しかも

重々しく聞いた。重苦しい雰囲気漂う。

後日、丸谷才一氏が、「この質問は、親子井にとって鰻井とは何か、ときくようなものだ」とからかわれる。

NHK がらみでは、生番組だから、いくらでもある。災害時に NHK のアナウンサーが、被災地の役所の人に質問をする。その時、緊急電話がかかってきた。普通の人間なら、「どうぞ電話に出てあげてください」と言うところを、このアナウンサーは、決められた時間を消費しようと、しょうもない質問を投げかける。あまりのことに、曾野綾子さんが、「傲慢なサル」と呼んだ。

こういう一種浮世離れした人は、ある程度の会社や役所には、必ずいる。で、仕事の足を引っ張る。・・・こういう人も大事だが、適所で使わないといけない。

「学のあるバカ」は、単なる「学校秀才」である。

本当に頭のいいひとは、難しいことをたとえ話を使って、だれにでもわかりやすく教えてくれる人である。

引用といっても、ボクの見解が時々混じっていますが。

この筆者は、司馬さんやその他の文壇の名士や白洲次郎さんの教えをうけたことなどに興味があるらしい。いかにも、朝日人（週刊朝日の編集長から、朝日新聞の編集委員をされた方である。朝日のなかではまっとうな意見を言うことが時にある程度の人）である。

「学バカ」は、勿体ぶって語るが内容が伴っていないから、みんなにバカにされる傾向がある。プライドだけは高いから、偉そうに語るが、要するに何が言いたい?!ということである。

プッ！ これじゃあ、まるつきり裁判官じゃないか。・・・そうか、最近、わけのわからない理屈をこねて聴衆を煙に巻いて判決をくだすのが往々にしているが、「学のあるバカ」だったんだ。・・・そうでなければ、あるかないかわからない「悪魔の証明」をしろ、とでもいうようなことを言うはずがない。9 万年前の阿蘇山の爆発ががいつおこるかわからないから、伊方原発の再稼働をしてはいけない、などと、思わず嗤ってしまうような判決がでるのも、この所為だったんだ。

2018.02.04. (この稿、当然続きます)